奈良女子大学で地方創生関連『なら学（プラス）＋』の最終講義を開催
～受講学生から奈良への提案アイデアが多数寄せられる～

文部科学省が全国で推進する『地（知）の拠点大学による地方創生推進事業（COC（シーオーシープラス）＋）』※に関して、奈良県内では、奈良女子大学が奈良工業高等専門学校および奈良県立大学と3校協働で『共創郷育：「やまと」再構築プロジェクト』として同事業に採択され、2015年度から取組中である。

※大学が地方公共団体や企業などと協働し、地方における魅力ある就職先の創出・開拓と、その地域が求める人材育成のための教育カリキュラム改革を行う取組みに対し、同省が支援する制度。地方創生の中心となる「ひと」の地方への集積を目指す。

同プロジェクトの関連講義が、奈良女子大学で17年度後期に『なら学（プラス）＋』（上記3校の単位互換科目として指定）と題して開講された。この講義は、県内の企業や自治体から多様なゲスト講師を招いて奈良の魅力の様々な側面に触れながら、学生の課題発見力・問題解決力・提案力を養い、地域で活躍できる「生きた知」を身に付けた未来の地域リーダーを育成することを目標としており、18年1月23日に最終講義が開催された。

はじめに、同大学やまと共創郷育センター長の成瀬九美教授から概要説明があり、半年間の講義の内容を振り返った。次いで、同大学が県南部に展開するサテライト施設での活動について、学生2組が「十津川村」（散歩道への看板設置、古民家再生と手作り品販売等）と「野迫川村」（学生による小中学生向け学習支援）に関する事例発表を行った。さらに、学生が事前提出した160件以上の最終課題レポート「奈良に提案したいこと」の内容を踏まえ、私が「大学生の視点を地方創生に活かす」と題した総括講演を行った。

奈良女子大学には毎年ほぼ全都道府県からの入学者があり、いわゆる「よそ者」の多様な視点からのユニークな提案も多く見られた。こうした取組を通じ、今後も同大学が「地域の知の交流拠点」として企業・行政・住民等と結びつき地方創生の発信源となることを期待したい。　（吉村謙一）

最終課題レポート「奈良に提案したいこと」の一部抜粋

提案テーマ	概　　要
SNSの活用	インスタグラム、ツイッター等での積極的な情報発信、話題作り。
奈良県民の意識改革、再教育、郷土愛向上	地元の良さをまず県民自身が再発見する。他県にない素晴らしい素材が揃っているのに県民自身が卑下しない。
体験型観光の推進	自然の中でのグランピングと周辺アクティビティの組合せ、民泊・ゲストハウス等を拠点とした体験プランの提案など。
空き家の古民家を利用したコスプレ撮影スタジオ	本格的な和室のある撮影スタジオは少なく、実際の古民家を使用すれば競争力があると思われる。
「和歌巡り」観光プラン	著名な和歌が詠まれたゆかりの場所を実際に巡るコースの提案。
「女子旅」にフォーカスした情報発信	「女子旅」という切り口で食・体験・ショップ・スポット等を紹介する。専用サイトやSNS等でのわかりやすい発信。
聖地巡礼（アニメ・映画等）	奈良に関する歴史をモチーフとするアニメ・映画等との連携。ロケ地見学ツアーの企画等。
女性客をターゲットにした「ファスティング（断食）一週間プラン」	寺や神社で修行体験とファスティングを組み合わせ宿泊する。胃を慣らす準備食や復活食に精進料理等を供する。
林業、靴下製造業、清酒製造業等の活性化	県内の特徴ある産業の活性化と積極的な拡販。大学との連携など。
「コネクターハブ企業」の育成	地域の中で取引が集中し地域外とも取引を行っている「コネクターハブ企業」を育成し、地域内の資金循環を活発にして経済を活性化することで、県内就職率を引き上げ若者を地元に引き留める。
女子学生主催の企業との交流会	固定的性別役割意識を持つ企業の意識改革が目標。企業の女性活用状況を改善し県内女性就業率を向上させる。
長期の県内中小企業インターンシップ	2か月間程度の長期有給インターンで責任感を持った仕事をすることで、学生は県内企業で働くイメージ作りができ、企業とのミスマッチも軽減できる。
県内企業就職者と1、2回生の懇談会	就職活動の体験を具体的に聞き、早い時期から学生に県内での就職という選択肢をイメージさせる。

（注）学生の提案テーマ例。類似した内容の複数人からの提案を当研究所で適宜一つにまとめたものもある。

最終講義の教室全景（左上）、十津川村の事例発表（右上）、野迫川村の事例発表（左下）、総括講演（右下）